

醫學專門學校時代

目次

一 はしがき ..... 三

二 初期 ..... 六

三 中期 ..... 一七

四 後期 ..... 二四

# 醫學專門學校時代

片岡八束

## はしがき

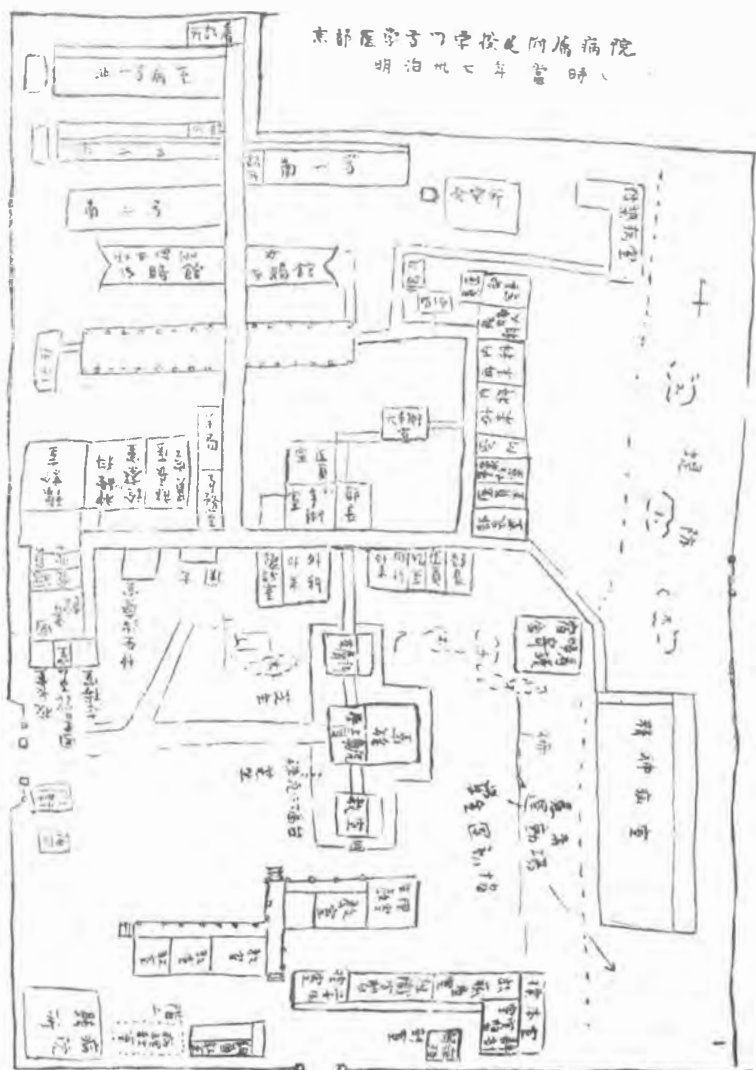
専門學校時代の編纂に當つて、吾々は是を初期・中期・後期の三時期に區別して記述することゝした。本學は創設以來漸進的に發展して遂に大學陞格の目的を達成したのであるが、其の最終の時期である専門學校時代も、大學への陞格の階梯として考ふる時、自ら三期に分つ事が出来ると思う。即初期は陞格への胎動時代であり、中期は其の準備完成時代であり、後期は直接行動時代と云うことが出来ると考ふる。

## 初期

自明治三十六年  
至同四十一年

明治三十六年三月 専門學校令の發布と共に、六月廿日 本校は京都府立醫學專門學校と改稱せられ、從來の療病院は附屬療病院となつた。爾來本校は教室の完成並に増設を企圖し、三十七年度より三十九年度に涉つて基礎醫

京都府立醫科大學附屬病院  
明治三十七年當時



(和田彌三郎筆)

學教室の新築を行うと共に、其の内容設備の充實改善が計られ、一方四十年より四十五年度に至る繼續事業として、臨床醫學教室の改築、附屬療病院の病舎數棟の新築、その他發電所・洗濯場・藥局等にも一大改築が加えられ、茲に校院の輪廓内容に於て面目を一新するに至つた。一面諸般の規則も逐次改正せられたが、その内特筆すべきは、教諭の海外留學規程が制定され、毎年留學者を歐米諸國に派遣することゝなつたことである。斯くて本校が專門學校としての基礎を確立し、以て他日大學に陞格するに至る階梯としての礎石を置いたことゝなつたのである。

明治三十六年一月 神經科、產婦人科及び内科の研究室を増築し、且つ校内空地に二階建一棟を新築、階上を病理學教室、階下を衛生細菌學教室に充てた。當時病院は部長の充實と共に外來患者の診察は左の通り定められていた。

新患 火木土  
舊患 月水金

内科第一部長 醫學士 望月惇一

新患 月水金  
舊患 火木土

内科第二部長 醫學士 工藤外三郎

新患 毎日

外科部長 醫學士 池田廉一郎

同 同

眼科部長 醫學士 伊藤元春

同 同

神經科部長 醫學士 島村俊一

同 火木土

產婦人科部長 醫學士 高山尙平

同 毎日

皮膚科部長 醫學士 江馬章太郎

四月 常岡良三、助教諭となり衛生細菌學の擔任を命ぜられた。五月 院長兼教諭高山尙平が福岡醫科大學教授に轉出のため退職。氏は前任足立健三郎教諭の跡を繼いで、明治二十八年一月産婦人科部長兼教諭として來任、爾來専心校院の發展に寄與し、氏の得意なる手術は世上既に定評あり。氏の就任以來産婦人科教室は面目を一新、研究室の設備等も大に整えられた。一面院長としてよく島村校長を助け、その在職中の功績は没すべからざるものがあつた。後任として秋元隆次郎を部長・教諭として迎えることとなり、而して



一 俊 村 島

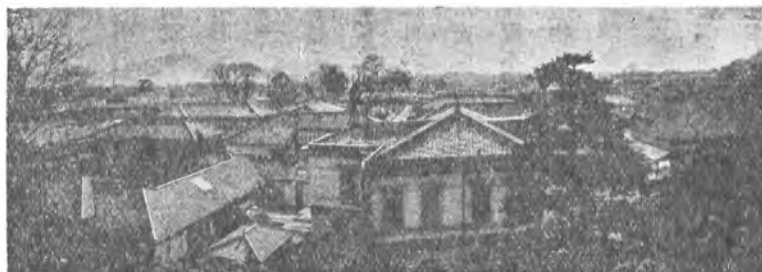
島村校長が院長兼務を命ぜられた。六月 曩に本年三月専門學校令發布せらるゝや、本校もこれに伴い自今京都府立醫學専門學校と改稱、療病院を本校附屬とし、茲に始めて學校が主となり病院は客の地位に變ることとなつた。茲に於て一般設備の整頓を計ると共に校舎を根本的に改築し、以て本邦に冠たる専門學校の樹立に邁進することとなり、發展の第一期計畫に着手することとなつたのである。十月 療病院幹事大野政忠退職、柿沼鉉太郎がその跡を繼いだ。六月三十日府知事は、現在教諭を醫學専門學校教諭に任ずる旨發令した。

明治三十七年二月十一日 日露の宣戰大詔が降つた。四月 京都府訓令三六號を以て本校職制・療病院職務規程・職員海外留學規程及び看病人規定が制定せられた。柿沼鉉太郎が本校幹事兼療病院庶務部長を命ぜられた。七月 職員海外留學規程に依つて、初めて教諭池田廉一郎が外科學研究のため二カ年間獨乙へ留學を命ぜられ、七月二十四日京都を出發した。依つて谷靜也が講師委嘱、外科部長心得を命ぜられた。助教諭田村克之、教諭に昇任、解剖學を擔

當した。鴨川堤防上に患者運動場を新設し、又傳染病室は從來三等室のみであつたのを、一・二等病室を増設、神經精神科診察室の西側に研究室が出来た。

明治三十八年三月 本校學則を改正、同時に級長規程・制服規程を改正、又外國人入學規程及研究生規程も同時に制定された。七月 校内空地に二階建西洋館を建設、階上を圖書館として圖書室及閱覽室とした。他に病理學教室の附屬室を設け、階下を學生控所及び學生食堂とすることゝなつた。十月 日露戰役に際し、校長島村俊一、教諭望月惇一、工藤外三郎の三名は、大阪陸軍豫備病院へ一カ年間毎日曜日に陸軍衛生部補助員として出張、患者の診療に従事していたが、平和克復と共に夫々解除せられた。十月十六日平和克復の詔勅が下された。校内運動場に解剖學教室が新築されることゝなり、鴨川に沿ひ新たに運動場が設置されることゝなつた。

明治三十九年三月 校内に解剖學教室として三棟の西洋館を新築、内一棟は二階建にして、階上を教諭室・圖書室に充て、階下は助手室・研究室・器械室・暗室等に利用された。一棟の平家建は組織實習室とし、尙一棟は製作室・假標本室・學生閱覽室・準備室等に設備され、水槽及動物飼養室が附屬し、茲に解剖學教室は完備した。現在之等建造物は全部取拂われ、跡には堂々八十周年記念會館が設立され昔を偲ぶすがない。又元生理學教室を改造し、病理解剖室及準備室・病理解剖標本材料室・屍室・冷藏室・解剖標本材料室を新築、之に東方に連つて解剖實習室が建造される等、基礎醫學教室の完成はかくして進捗の一路を辿つて行くことゝなつた。四月 從來の汽罐室を廢し、新發電所として煉瓦造平家建の西洋館を、京大工科大學電氣工學教室青柳榮司博士の設計により建設した。新發電所には二個の大蒸汽罐を有し、且つ二臺の發電機を備え付け、校院内の灯用・醫療用其の他に供用せられることゝなつ



基礎醫學教室

た。助教諭常岡良三、教諭に任ぜられ、衛生學細菌學擔任。患者用浴室の設備が王來たのも此月である。六月 助教諭伏原寅男、内科第二部長心得となる。八月 解剖學及び内科學教室を階段式に模様替せらる。校長島村俊一は京都大學に論文を提出し、學位令第二條に依つて醫學博士の學位を受領した。主論文「上行性神經炎に因する脊髓炎」外三編。教諭工藤外三郎は、内科學研究のため二カ年間獨乙へ留學を命ぜられた。九月 外科部長心得講師谷靜也退職した。十月 校内空地に生理學及び醫化學教室として二階建二棟が新築せられた。東方を生理學教室とし、階上五室を教諭室・助手室・器械室・藥品室・圖書室となし、階下五室を實驗室・研究室・天秤室・暗解卵器室として設備された。西方一棟は醫化學教室として、階上三室を教諭室・圖書室・助手室、階下四室を實習室・研究室・器械室・小使室に充當せられた。十一月 學用患者慰藉費募集のため、二十五日京都市會議事堂に於て慈善音樂會が催された。當時の教諭その他が發起人となり、賛成者として大森知事・府會議長・京都市長・京大總長その他知名の士の名が列せられていた。晝夜二回開會せられ、島村校友會長は開催の主旨を説明した。會は第四師團軍樂隊の演奏に始まり、午後十時滞りなく終了した。當日の収益七百二十四圓四十三錢は學用患者慰藉基金とし、今後の運営については幹事柿沼鉉太郎に一任することに校友會役員會に





臨床教室及び病舎

於て決議した。

明治四十年一月十日 豫て獨乙留學中であつた教諭池田廉一郎は無事京都驛着歸朝した。越えて十九日歸朝歡迎會が開催された。同教諭の洋行談の後、一同立食の宴が催され、夜に入つて學生の餘興演藝會が催され、學生の二輪加、琵琶、尺八、手品など賑やかに演ぜられた。本月本校學生の定員は五百五十名に増員となつた。

二月 衛生細菌學教室として二階建一棟と平家建二棟が新築され、二階建は階上四室、教諭室・助手室・器械室・藥品室・天秤室・小使室とし、地下に冷蔵庫を設けた。平家建一棟を學生實習室、他の一棟は培養基室・製作室・動物室・ペスト室と、衛生細菌學教室もかくして完成せられたのであつた。院内に洗濯場の新築が落成した。三月 校庭西方の空地に宏大なる教室一棟を新築、第五教室と稱した。室内は階段式で、最新式の設備を有し、學生約三百名を教授し得る大教室であつた。爾來三・四學年の合併講義に、或は講演會に、専門學校最後まで、第五教室の名のもとに學生に親しみを持たれていた。又洛東大日山、市有共同墓地二百六十坪を借り入れ、周圍に柵を廻らし中央に一大墓標を建設して、「學用患者之墓」と刻した。六月一日午後二時學用患者吉田彌藏外百十五名靈位の改葬、墓前祭が厳かに執行された。大日山は本名を東岩倉山といい、栗田口の北側にあり、文永五年九月龜

山上皇臨幸あり、建長七年十二月後嵯峨上皇の臨幸ありし地なりと聞く。新緑鬱蒼として幽寂の境地である。醫學界



墓の患者の學

に貢献した幾多の靈は、此の地に永久に安き眠りに就くことゝなつた。  
三月 本校學則細則改正。産婦人科教室産室一棟落成す。七月 教諭池田廉一郎は論文を京都醫科大學に提出中であつたが、二十四日付醫學博士の學位を受領。主論文「膀胱上皮に於ける表皮様化生の研究追加膀胱上皮に於ける「グリコゲン」沈着並に其臨床的意義に就て」（獨文）外二編。九月 學用患者病室落成。二階建にして、階上を看護婦寄宿舎に充て、階下を總室三室、他に重症室四室の設備が出来た。

明治四十一年二月 教諭田村克之（解剖學）、退職した。四月 前島長裕が教諭に任ぜられ解剖學を擔任。小兒科が内科より分離して始めて獨立、本庄謙三郎が教諭に任ぜられ、小兒科部長を命ぜられた。五月 助教諭伏原寅男、教諭となり、内科第二部長を命ぜらる。校友會々則改正、當時宿題となつていた評議員制度を實施、職員十四名、特別會員（市内在住の先輩）十名、各學年より學生十名がこれに加わることゝなつた。當時の正會員學生の會費は一カ年二圓六十錢、特別會員は一カ年一圓、但し一時に六圓を納入すれば十カ年會員に、十圓を一時拂すれば終身會員といふことになつていた。六月 病院内に臨床講義室・傳染病觀察室が落成、次いで外科手術場が改造竣工した。七月 職員の海外留學規程を改正、自費を以て留學する者に對しても學資を補助出来る途が拓かれた。八月一日 教諭角田隆は神戸出帆の加茂丸で、滿二カ年の獨乙留學の途に就いた。三等病室の新築落成。平家建總室として之を新三

等病室と名づけた。又看護婦寄宿舎を新築した。十月 校庭に本館講堂新築落成す。二階建にして、階上大廣間を講堂とし、階下五室、校長室・幹事室・教務課・應接室・會議室となし、正門より玄關に至り本校の外観一應備わる。

助教諭中村登、耳鼻咽喉科部長心得を命ぜられ、耳鼻咽喉科が新たに獨立開設せられた。十一月二日 天皇皇后兩陛下の御眞影を下賜、新裝なつた講堂に於て奉戴式を舉行した。十一月六日 講堂に於て本校創立三拾周年紀念式典を舉行、大森知事・菊池京大總長・荒木醫科・井上法科各大學長・西郷市長・折田三高校長等朝野の貴顯紳士、卒業生等五百名參列し盛儀を極めた。この日、本校創設に大功のあつた明石博高翁が式典に列席し、來賓代表として祝辭を讀んだ。草創の苦難と今日の盛儀と思ひ合せて轉感慨に堪えず、感涙にむせんだという。

祝辭に曰く

維時明治四拾壹季拾壹月六日京都府立醫學專門學校創立三十季紀念式典ヲ舉行セラル 惟ルニ博高翁ニ職ヲ京都府ニ奉スルノ日人命保全ノ大旨ニ遵ヒ府治ノ浹治ヲ全フセント明府ニ建議シテ謂ク 名醫ヲ招テ生民ノ疾病ヲ救ヒ醫生ヲ教導シテ以テ日新ノ方技ヲ傳シムル爲メ療病院ヲ設ケ醫學校ヲ起スノ籌圖ヲ以テス 府議之ヲ納レ而シテ明治四年十一月是レガ施設ノ任ニ當ラシム 府廳此舉ヲ公ニセルヤ上下交々資ヲ翼ケ力ヲ協セ慶讃ノ聲ト俱ニ基本漸ク備ル 況ンヤ

聖上恩賜ノ特典ヲ蒙ル在ルヲヤ 是レ乃チ本校創業ノ原子タラン 既ニシテ校門開ケシ以來碩學有識ノ士經營ノ懋ニ賴リ年ヲ逐ヒ日新月歩今ヤ天下有力ノ一大醫學校ニ進ミ是ノ校門ヨリ出ル學醫許多ニシテ都鄙ニ及ビ治ク人生ニ幸福ヲ享受セシムル者抑本校ノ德ニシテ其國家ニ對スル功績實ニ顯著ナリ 博高退テ野ニ在リ老軀空泡ニ屬スト雖モ是ノ式典ニ臨席ヲ辱ス 回顧スレハ參拾有餘季ノ前ニ於ル微原子培痕シ繁殖シテ是ノ盛況ヲ呈ス 衷心轉感喜ニ堪ズ 茲ニ聊カ所思ヲ陳シ虔テ本校ノ隆昌永享ヲ祝ス 敬具

明石博高

なお翁はその後二年、明治四十三年六月二十日孫橋の寓居に歿した。年七十二。翌七日は一般市民に校内を開放縦覧に供し、兩日に涉つて種々の餘興が催され、殊に七日午後、久邇宮多嘉王、同妃靜子殿下も御來場になつた。式當日は午後一時より大宴會、模擬店、ビヤホール等が催され、終日賑いを呈した。同夜先斗町共樂館にて同窓生の祝賀懇親會を開催、同窓二百三十五名出席、第一回より第三十一回までの卒業生を網羅した。二十七日 小松原文相は松村普通學務局長を帶同、本校教室・實習室等の施設を視察した。十二月 曩に内科學研究のため獨乙に留學中であつた、教諭工藤外三郎は無事歸朝した。

當時獨乙に留學する醫學者の内で、本校出身者は左記の通りであつた。

太田爲次 (三一卒)	ベルリン	一般醫學
山本忠孝 (三九卒)	同上	同上
角田 隆 (二九卒)	同上	病理學
新宮涼男 (三〇卒)	マールブルグ	内科學
三好慶輔 (三〇卒)	ミュンヘン	外科學
岡田盛吉 (二八卒)	ビュルツブルグ	矯正外科學
鈴木嘉吉 (三七卒)	同上	眼科學

我が校が明治十七年三月、始めて第一回卒業生を出してより本年六月に至る迄、卒業生總數一二二四名。當時開業七九四名、教育に従事するもの二五名、病院勤務一四二名、陸海軍一一四名、外國留學及び開業二五名、未詳五三名、死亡七一名である。

當時職員は、學校には、校長、教務主任、幹事の外、教諭一五名、助教諭一〇名、囑託講師一〇名、助手九名、書記五名、學生數は一學年一五五名、二學年一四五名、三學年一一六名、四學年一〇三名、溫習生五名、計五二四名、外に清國留學生六名であつた。附屬療病院には、院長の外、部長一名（兼務）、醫員四二名（兼務四）、調劑員八名（兼務二）、書記一名（兼務六）、雇員諸傭人校院を通じて七一名、看病人二三五名、産婆生徒二四名、看護婦生徒七八名であつた。患者の一日平均は、入院患者が二二〇名、外來患者が三五〇名であつた。

## 中 期

自 明治四十二年  
至 大正 六年

本期間に於て、十カ年計畫の學校及び附屬療病院の大擴張案が一應完成せられ、其の外觀が一新せらるゝと同時に、教授の大更迭が斷行せられ、茲に其の内容が刷新せられたのであつて、本期に於て大學陸格の基礎が確立せられた譯で、本校發展上最も重要な時期であつたと思う。

明治四十二年二月 本校學則改正により、本年度卒業生より京都醫學專門學校醫學士の稱號を得ることゝなつた。  
三月 教諭伏原寅男（内科學）退職。四月 市内下京區珠數屋町にベスト病患者發生した。これが京都に於けるベスト發生の嚆矢であろう。當時府衛生技師で本校講師であつた井堤囑一指導の下に、本校三・四年の學生は四月二十六日防疫の實態を見學した。此頃より既に學校當局及び學生間には、遠からず豫科が置かれる等の風評が起つていた。

豫科は三年では贅澤に過ぎるので、一年乃至二年で充分だと云う様な評もあつた。又校章MSの意匠に飽き足らず、一般より意匠を募集すべしとの聲もあつたが、遂に議熟さず、校章は専門學校末期迄變ることがなかつた。五月 助教諭中村登、教諭となり、同時に耳鼻咽喉科部長を命ぜられた。又三十三年本校の卒業で、京都帝大森島庫太教授の助手であつた藤谷功彦が教諭に任ぜられ、藥物學を擔當することゝなつた。附屬療病院内鴨川ぞいに特等病舎・特別一等病室の新築が落成した。八月三日 明治三十三年卒業の尾見薫、醫學博士の學位を受領した。本校卒業生にして學位を授與せられたのは、氏を以て嚆矢とする。同氏は京大猪子門下にして、當時臺灣總督府醫學學校教授より滿鐵大連病院外科部長に轉じ、校の内外に其の才腕を唱われた人である。主論文は「腹水の外科的療法に對する臨床的及實驗的追加」(獨文)。九月 附屬療病院内に看護婦廬所を新築、爾後本院自營となつた。又本校にては兼て外國語教育の重要性に鑑み、當時三高に教鞭をとつて居たフリッツ・エス・ブラッシュを講師として招聘した。十月 文學士廣木多三、教諭に任命、獨乙語擔任。藥學士立入保太郎、教諭兼藥局長に任ぜられ、獨乙語及び調劑實習を擔任、前任藥局長兼教諭町田仲は、九月依願退任した。附屬療病院の玄關新築。十一月 醫化學實習室が増築せられた。

明治四十三年二月 東京帝大助教授永井潜を講師に迎え、毎月、水曜日二時間宛、一般生理學講義を第五教室に於て開講、學生に聴講せしめた。三月 校長島村俊一、願に依り職を免ぜらる。氏は明治二十七年十二月始めて本校教諭に任ぜられ、神經精神科學を擔任、部長となり、明治三十三年五月、加門桂太郎校長が京大に轉出の跡を亨けて校長となり、爾來本校の最も多事多難の秋、克く本校の經營に當り、京都大學創立當時獨り吾孤城を死守して今日の隆昌の因を作り、所謂本學中興の祖としての功績は永く本學八十年史上に特筆大書さるべきものがある。病痾のため

遂に校長の繁務より去ることゝなつたので、當時良校長を失ひ學校一致哀愁措くものがなかつた。島村校長退職に伴い、教諭望月惇一が新校長として就任。氏は明治三十五年本校教諭に任ぜられ、内科學擔任、内科第一部長となつて



望月惇一

今日に及んだ人。島村校長により計畫せられた事業を繼承、今後本校の隆昌發展と改善に大に期待せられるものが多かつた。四月一日 學則の一部を改正して、明治四十二年以前の卒業生にも、論文を提出して京都醫學專門學校醫學士の稱號を請求することが出来ることゝなつた。審査檢定手数料は參拾圓に決められた。望月校長、工藤教諭は京大に論文を提出、學位を受領した。望月博士主論文「トリプシンに由る蛋白質分解の知見に就て」(獨文) 外三編。工藤博士は「攝護腺病理補遺(澱粉様小體色素巨大細胞)」(獨文) 外五編。教諭伊藤元春は、眼科學研究のため滿二カ年間獨乙へ留學を命ぜられ出發、留守中講師井上喜久治が部長を擔當した。倫理學講師として京大教授桑木嚴翼を迎えた。九月 京大助手佐武安太郎、教諭となり生理學を擔任。就任僅か二カ月にして、十一月、生理學研究のため二カ年間獨乙へ留學を命ぜられ、十二月十日神戸出帆三島丸にて留學の途についた。十月 曩に歐洲留學中の教諭角田隆は十月二十日歸朝。十一月、第五教室に於て歡迎會を開催、席上二時間餘に涉り歸朝第一聲を放つた。十月二日 此日我が校は皇太子殿下の行啓をお迎えした。當日午後二時半、知事の先導にて本校御着、正門前より玄關に至る間職員學生一同がお迎えし、望月校長の御案内で講堂に入られ、望月校長及び教諭一同に拜謁を賜り、後、第五教室に於ける三、四學年合併授業の工藤教諭の内科學、

第二教室にて第二學年池田教諭の外科總論、第一教室に於ける赤座教諭の解剖學の各講義の狀況を親しく御覽になり、次で第三教室にて梅原講師その他の説明にて、病理・解剖・生理學等の器械・標本を豪覽、再び講堂に於て御少憩、一同御見送りするうちに午後三時半本校を御出門、お歸りになった。尙當日殿下の御寫眞を本校に賜り、本校よりは學校寫眞と拜謁者名簿、各教諭のその日の講義内容要旨を宮内省に差出した。

明治四十四年一月 生理學擔任教諭永井德壽、退職。二月二十一日 本校二十二年卒湯川玄洋、學位受領。主論文「日本人生理的胃液の鹽酸量に就て」(獨文) 外三篇。氏は大阪市に胃腸病院を經營し、ノーベル賞受領の京大教授湯川秀樹博士の岳父である。氏と同時に、三十三年卒の教諭藤谷功彦、學位を得た。「人工胃液の消化力上に及ぼす各種物質の影響に就て」(獨文) 外六篇。五月 教諭池田廉一郎は、曩に新設せられた官立新潟醫學專門學校教授兼附屬醫院長に就任のため退職。氏は三十五年五月教諭・外科部長となり、三十七年本校留學規程による最初の留學生として獨乙に留學、歸朝後教務主任として學生の訓育指導に當つた人である。教務主任の後任には工藤教諭が當り、新たに外科部長・教諭として京都帝大助教、伊藤外科の青年學徒副島豫四郎を迎えた。助教諭佐々木恒一、教諭に昇任、神經精神科學擔當。六月十四日 兼て校友會總會に於て、水上部委員より端艇三隻を新造する件を提案、調査のため委員附托となつていたが、この日臨時總會に於て豫算案は原案通り可決決定された。當時の水上部委員長は教諭中村登であつた。尙當時の豫算案は左の通りで、現今の貨幣價值に比較して興味深いものを感じる。

## 短艇新造費豫算

收入計 金壹千四百四拾圓



内譯

二〇〇圓 職員よりの寄附

四〇〇圓 學生よりの寄附

三〇〇圓 短艇基金

五四〇圓 校友會短艇基金一時借用、四十五年以降順次基金を以て返却

支出計 金壹千五百圓

内譯

一〇八〇圓 短艇三艘新造費

但し 短艇一艘新造費三六〇圓、長さ四十尺巾四尺三寸深さ一尺七寸、附屬品總て新製一切共

三七五圓 艇庫新築費

内

二五〇圓 艇庫一棟、二十五坪新築費一坪に付一〇圓の見込

但し屋根亜鉛板張周圍六分板張

一二五圓 短艇上下し軌道及艇庫地均し見積

四五圓 雜費

但し「FLAG」「シート」「ロープ」油差「フェンダー」及建造中時々出張旅費共、其他本年度艇庫敷地借用料一時に製造の上現金を支拂すれば約六〇圓減額の見込み

當時岡山醫專四年生が本校及附屬療病院を見學した際、本校に對する評として、細菌學教室及實習室の立派なこ

と、病理學教室の標本の豊富なこと、醫化學實習室の設備あること、精神科病室の偉大なこと等を擧げている。なお又、學生に一般外來患者の豫診をとらせているのは實に羨望に堪えないことであると述べた。當時一般外來患者の學生豫診は、帝大を除いては吾校のみであつた様である。本校學生間では實地習得上最幸福の地位にありとして、患者に對しては特に親切丁寧に接しなければならぬという自覺を持つていた。八月 法醫學擔任として、京大助教小南又一郎に講師を囑託した。十二月九日 角田隆、醫學博士の學位を受領、主論文「日本住血吸蟲卵子に因する結核樣結節形成に就て」(獨文) 他七篇。

明治四十五年(大正元年)五月 教諭佐々木恒一(神經精神科)退職。助教諭野田浦弼、教諭に任ぜられ神經精神科學を擔任、同科副部長を命ぜらる。教諭本庄謙三郎は、小兒科學研究のため、滿二カ年間獨乙に留學を命ぜられた。そのため坂井千春に講師委嘱、同時に小兒科部長を命じた。七月三十日 明治天皇登遐、九月十三日 職員學生一同校庭に於て御大葬送拜式、十四日七條驛に靈柩車を奉送、同夜御埋棺の送拜式を舉行した。十月十二日 眼科部長井上喜久治附屬療病院に入院中逝去し、京大教授淺山郁次郎に講師並に眼科部長を囑託したが、同月曩に歐洲留學中の教諭・眼科部長伊藤元春が歸朝した。教諭秋元隆次郎は休職を命ぜられ、私費を以て獨乙に向つた。直ちに京大より迎諾を迎え、講師・產婦人科部長を囑託したが、日を經ずして加治安信が講師・產婦人科部長に變つた。教諭常岡良三は細菌學研究の爲、滿二カ年間獨乙に留學を命ぜられ、講師として帖佐彦四郎を迎え、細菌學講座を擔任せしめた。十一月五日 曩に計畫せられた校友會水上部の新艇三隻が、愈々その建造を終えたので、大津市石場濱に於て進水式が盛大に行われた。望月校長・中村水上部長の祝辭、望月校長の文子令嬢が靜かに三艇の繫繩を切り、新艇は

斜臺を滑り湖上に浮んだ。白鳩の群が高く湖畔に飛び、奏樂・煙火・拍手に式を終り、式後記念競漕大會が行われた。新艇は「靜虎」「飛龍」「敷島」と命名された。

大正二年二月 助教諭大塚一郎、教諭となり、獨乙語擔任。四月 校長望月惇一は歐洲各國へ出張仰せ付けられ、四月五日京都驛出發、不在中教諭工藤外三郎が校長代理を命ぜられた。講師梅原信正が教諭に任命せられ、病理學を擔任することゝなつた。十一月二十四日 獨乙へ私費留學中であつた教諭秋元隆次郎が歸朝、直ちに復職した。

大正三年二月二十三日 歐洲出張中の校長望月惇一は、萬歲歡迎裡に午後四時京都驛着歸朝した。本校附屬療病院に入院中の教諭藤谷功彦（藥物學）は二十八日逝去。角田教諭執刀の下に病理解剖が行われた。一同襟を正して見守つた。越えて三月四日午後一時二十分、寺町今出川上ル博士邸出棺、途中故人の思出深い本校前を通過、洛東眞如堂に於て佛式により葬儀が行われ、後遺骸は同境内藤谷子爵家墓所に埋葬せられた。三月 藤谷教諭擔任の藥物學は、京大助手革島廉三郎に講師を囑託した。五月二十四日 御登遐の皇太后陛下の遙拜式を行い、二十五日七條驛に靈柩車を御見送り申上げ、同夜講堂に於て御埋棺遙拜式が舉行せられた。六月七日 故藤谷教諭の百日祭を洛東眞如堂にて營み、職員學生一同參列した。

大正三年に起つた特筆すべき事實は、七月より八月に涉つて行われた空前の教諭陣容の一大異動であつた。即ち教諭伊藤元春（眼科）、同江馬章太郎（皮梅科）、幹事・庶務部長柿沼玄太郎、教務課主任清田專藏が依願退職となり、教諭秋元隆次郎氏（産婦人科）、同前島長裕（解剖學）は休職を命ぜられ、續いて教諭副島豫四郎（外科學）は、再び京都帝大醫科助教授に復歸、退任した。後任補充として、眼科に小柳美三、皮梅科に佐谷有吉、産婦人科に加治安

信、解剖に岡嶋敬治、外科に河村叶一が夫々教諭に任ぜられ、部長に補せられた。幹事には中道貫一が就任し、茲に本校教諭陣と事務首脳者に大改革が斷行せられたのである。當時學校内部では、盛んに種々揣摩臆測が行われ、殊に學生の間では、憂校の餘り教室の此所彼所に密かに集り、學校の前途を祝福する者、案ずるもの等一種不安の空氣が校内に充滿した。當時其の眞相は明らかにされず、只想像を逞しくするのみであつた。此の改革に大きな役割を演じた教諭角田隆は、名譽教授として今なお元氣な姿を毎日の様に病理學の研究室に見ており、後進の指導を續けているので、其の間の委しい事情を尋ねることゝした。

#### 角田名譽教授の談片

當時の學校・病院の經營は、先に京大創立當時各教諭が轉任の後、非常な難關に遭遇したと同様、其の經濟狀態は非常に苦しいものがあつた。所謂本學第二回目の經濟危機に直面していたのが實狀であつた。府からは補助金を仰ぐことも出來ず、全くの特別會計で、文字通りの自給自足をせざるを得ない狀態であり、教諭の研究上必要な圖書・實驗用動物等も、教諭の乏しい俸給の内から自辨しなければ、學生を指導することさえ出來ぬという有様であつた。反之現在の大學は、幾分恵まれた狀態にあることは慶びに堪えない。此の所謂經濟恐慌時代を如何に打開するかが、當時學校として大きな問題であつた。當時基礎醫學の方は兎も角、臨床部門に於ては教諭の手腕力量、又は患者に對する熱意等の點兎角の批判もあり、旁々改革の必要が多分に感じられた。此際教諭の陣容を一新して、先ず何よりも病院の收入増加を計らねばならない。此意味からも一部教諭の勇退を願つて、新進氣鋭、然も有能の士を迎えることこそ現下の急務であると云うことに、學校當局の意見が一致するに至つたのである。私は甚だ憎まれ役を買わねばならぬ破目となつたが、愛校の精神から又止むを得ない。一朝事志と相違した場合、自らも責任を痛感して學校を去るの深い決意をして、茲に數名の教諭の勇退を願つた次第である。副島教諭はしつかりした人であつて、自一の外國留學を強力に要望せられたが、留學は順番もあ

り學校は直ちにこれを容れることは不可能であつたので、自ら辭任、再び京大伊藤外科の助教授に復歸することゝなつたのが真相である。幹事柿沼鉉太郎は、この犠牲者を出したことに對し責任をとつて、自ら退職を申出で、退職後直ちに東京日本赤十字社本部の要職につき、又同時に、永く教務課の事務主任の職にあつた清田專藏も、今回の異動と共に辭職、本校を去ることゝなつた。退職教諭の後任には、眼科に小柳美三（京大出身、後東北帝大教授となつた）、皮膚科に佐谷有吉（東大出身、後阪大教授となつた）、産婦人科に加治安信（京大出身）、解剖學に岡嶋敬治（金澤醫專出身、後慶應大學教授となつた）、外科に河村叶一（京大出身）を夫々教諭、部長として迎えることゝなつた。幹事には府庶務課長であつた中道貫一が就任し、一應茲に教諭陣營は整備された譯である。爾來豫期の通り、病院は外來・入院共に患者も増加し、本校の健全財政へ一歩ずつ前進することが、此度の改革によつて幾分でも成果を挙げ得たことを心竊かに慶んだものである。當時望月校長兼院長は外國出張より歸朝以來、強度の神經衰弱症で、事實劇務を擔當することは無理な状態であつたので、神戸市外春日野に轉地、専ら療養に努めていたが、自分は工藤教諭と共に親しく病床を見舞い、學校・病院の經營困難な時代に校長兼院長としての勞苦を思い、此の際第一線を去つて専心療養される様勸めたのであつた。私は本校を卒業して今日に至るまで、學校のあらゆる歴史のある處、必ず陰に陽にこれに參訓し、今以て大學のために微力を致すことは愉快なこともあるが、又一方時には甚だ迷惑な立場におかれることも屢々であつた。老來益々元氣に、然も愛校の精神に燃え、大學を愛する氣持は決して人後に落ちない。病理學教室は私の創設當時より現在に至るまで、所謂光輝ある傳統を誇り、立派な後繼者を得て全く安心しておられることは無上の喜びとしている處である。

十月 校長望月惇一は休職を命ぜられ、第一線を退くことゝなつた。氏は明治三十五年四月我が校教諭となり、四  
十三年島村校長退職の後校長となり、自來今日迄校運の發展と病院の隆昌に寄與し、患者に對しては親切、學生訓育  
には篤實、萬人その德望を慕つた。歐洲より歸朝早々病氣に罹り、職責を完うすることの不可能なるを知り、専ら靜



工藤外三郎

命せられた。

十一月二十三日 十カ年繼續事業であつた、本校及附屬療病院改築落成式が華々しく催された。此の日式典委員長は中村教諭これを承り、大森知事・松川師團長・井上京都市長・荒木京大總長・京大各學部長等、朝野の貴顯紳士並びに卒業生等無慮七百名參列し頗る盛儀であつた。午前十時開式。式後校庭大宴會場に於て、知事の演説、師團長發聲により萬歳三唱、校内には各種模擬店を設け餘興が演ぜられた。同夜先斗町共樂館に於て、本校先輩角田・中村・野田・梅原各教諭の幹旋により、盛大なる同窓生懇親會が開催せられた。二十三日、二十四日は校院内を一般市民に公開縦覽に供した。校門には大綠門、町内は幔幕、夜はイルミネーションにて景氣を添え、餘興は晝夜に涉り盛大に催

養することゝなつた。本校はこの良校長を失い哀愁禁じ能わざるものがあつた。後任として、教諭工藤外三郎が校長兼院長、内科第一部長となつた。氏は明治三十三年九月教諭に就任、當時主席教諭として今日に及んだ。新校長の就任と共に、本校は再び潑刺たる生氣を見るに至つた。小川瑳五郎が教諭、内科學擔任、内科第二部長を命ぜられた。小川教諭は明治三十五年東京帝大卒業、其の當時氏の學識は世に定評があつた。同月二日、豫て獨乙留學中の本庄教諭は、歐洲戰亂に遭遇したが無事歸朝。十月二十四日講堂に於て、工藤新校長並新任各教諭の歡迎會が催され、新校長はその抱負を、河村叶一教諭は新任教諭を代表して挨拶を述べ、盛會裡に散會した。この月初めて學生監の職制が設けられ、教諭角田隆がこれに任

された。尙兩日に涉り記念通俗講演會を催し、常識醫學の普及に努めた。當日の講師及び演題は左の通りであつた。



附 屬 病 院 玄 關

第一日

惡性腫瘍の療法

失明の原因

無性生殖

光線と醫療

醫術と科學

妊娠の診斷

結核の話

第二日

結核の通俗的統計

戰爭と精神病

戰爭と育兒

血族結婚の可否

癌の話

河村外科教諭

小柳眼科教諭

岡嶋解剖教諭

佐谷皮梅毒教諭

小川内科教諭

加治産婦人科教諭

角田病理教諭

梅原病理教諭

野田精神科教諭

本庄小兒科教諭

中村耳鼻科教諭

角田病理教諭

尙二十九日には、鴨川運動場に於て、久邇宮多嘉王、賀彦王、發子女王各殿下をお迎えして、記念大運動會を盛大に舉行した。

茲に繼續事業の概要を記載すると、

明治三十八年度 三萬四千八百圓を以て解剖教室・生徒控所・發電所の新築

明治三十九年度 二萬九千二百圓を以て解剖組織實習室・生理衛生教室の新築

明治四十——四十二年度 三カ年繼續事業 十五萬五千八百九十五圓を以て講堂・教室・手術場・各等病舎の建築

然るに患者の増加に伴い、内科、婦人科、神經科の診察室・治療室の改築の必要に迫られ、四十年代から大正元年度迄、既定豫算を増額して二十八萬七百二十一圓の豫算を以て建築が遂行され、更に大正二・三年度に於て、五萬三百九十八圓二十五錢を以て之が全部完成するに至つたものである。起工以來十カ年、新築・改築總坪數三千六百九十坪、總工費三十九萬九千二百三十一圓にして、當時の設計及び工事監督者は京都府技師一井九平であつた。

明治十七年三月第一回卒業生を出してより、大正三年迄三十七回、卒業生總數 一、八五四名

#### 開業醫

八九四

外國留學及開業

二五

#### 教育に従事

二三

中國人

三

#### 病院勤務

三六五

死亡

一〇七

#### 陸海軍

一九八

其の他

二三九

當時の本校職員學生の概要

#### 教諭

二一

助教諭

七

講師

五

#### 助手

一〇

書記

一一



學生 三九五 清國留學生 八

病院に於ては

部長 一一（何れも兼務） 醫員 三八

調劑員 一〇 書記 一二（兼務一〇）

事務員 六 技手 三 備人 八〇

看病人 一五二 看護婦生徒 一〇五

入院患者の一日平均二二九、外來患者の一日平均は三六一であつた。



金子元春

改築落成式典は、學校側の意嚮として盛大に舉行したいとの熱望から、當時學生看護婦の力の入れ方は大したものであつたが、特に當時は校歌と云うものがなく、學生間では此の機會に校歌の募集を決め、當時の四學年生金子元春が伊昔紅と云ふ名で當選した。兎も角學生團の歌として、此の式典に於て汪んに唱はれたものである。所謂「遲日の夢」が校歌の形となつて、豫科廢校に至るまで學生の間で親しまれ愛唱せられた。

「遲日の夢」の作詞者、大正四年卒業の金子元春より、特に「遲日の夢を追つて」と當時の學生生活の模様等を寄稿して貰つたので、以下それを掲載することとする。



# 學生團の歌

伊 昔 紅 作

二八四

一、 遅日の夢のほの白き

花橋の香に匂ふ

御溝の水の溜みては

鴨の川原の月見草

楊花は落ちて杜鵑

平安城を筋違ひに

二、 夏の火峰に聳え立つ

堯を走る稻妻も

幾春秋を光榮の

歴史飾らん彩にして

降魔の劔抜き放ち

天職に勇む丈夫よ

三、 秋の入日に亡びゆく

夢き肉の哀みに

聖も王も現世の

希望を捨て、鳥羽玉の

噫を救ふ術あらば

永久に黙せよ鐘の聲

四、 木蔭に残る霜柱

日脚短き人の世の

誰かは起ちて救はずば

いつか龍鰲の時やある

常世の春の幸を祝ぐ

我等が使命重きかな

花園分院の山本事務長から、「遅日の夢」の生れた當時の事情や、在學中の主なる事項に就いて「何か書け」と云う依頼を受けた。第三者の立場で史觀的に書く爲めには、的確な材料がなければならぬ。止むを得ませんから、是は飽くまで山本さんに對する私信ということでペンを執りました。従つて「私」というものが過剰に露出することゝ思いますが、その點おゆるしを願ひたい。

「遅日の夢」が實際二十年もの壽命を保つたことは、作者である私にも誠に意外であつた。八十年の校歴の中で、その四分の一にも當る歳月を、校歌として親しまれ陸んで貰つたことを思えば、「校歌の誕生」についてお話しすることも無意味ではないと思う。加之、校旗の紋様も、豫科生徒の帽章の紋どころも「橘」であることを知つて驚いた。之は後日のことで、その制定の基盤に何があつたか知らないが、私なりに考えれば、校歌の中の「花橘の香に匂ふ」から發案されたのではないかと推察している。思えばあの歌もよい日の下に生れて來たものである。私が四年生の時である。大正三年十一月二十三日、本校及び療病院の改築落成式典が行われた。改築をはじめて十二年目に全く竣工をみたのである。お祝は盛大にやりたいという學校側の意向なので、學生達も楽しい亢奮に驅りたてられた。唯その際、學生一同で歌う校歌が無い。それで早急に校歌募集のことを學生間で決めてしまつたのである。その時應募した私の歌が「遅日の夢」だつた。この當選した歌詞を携えて、當時の校長工藤外三郎先生に之れを校歌として認めて呉れとお願ひしたのだが、先生は學生自身で企圖したことだから校歌として認めることは出来ないと突跳ねられてしまつた。つまり私物だからいけないということだつた。この押問答の中へ入られたのが梅原信正先生だつた。先生の計らいで學生團の歌、即ち團歌といふことで發表された。後であの歌が校歌になつたという話を聞いて、私はこんな風に考えた。内縁關係ではあるが、永年連れ添つていてまだ子供が出来ない、さう云うときに生れた子は随分可愛がられる。子まで出来た以上、籍を入れなければいゝので、正妻に直すことにした。そうならいつまでも私生兒でおくわけにいかない。立派な嫡出子として認知される。之と同じ理窟で、團歌という私生兒が校歌と云う嫡出子として育てられたのである。次に歌曲の問題だが、これは昭和九年七月二十五日の大學新聞紙上で、大六會の中村復一郎さんが指摘した通り、遺憾乍らこと急だつたので一高の寮歌の曲符を拜借したもので、決して新曲ではありません。校歌ということだ

つたら、學校の責任に於て獨自の作曲を誰かにお願ひしたろう。國歌という軽い氣持で、それに作曲家を見つける餘裕もなかつたので、既存の曲を借用したのだつた。あとで校歌になつたと聞いて、この點だけは遺憾だつたと氣にかゝつていた。兎も角も國歌が出来たので、學生達は落成式を前に猛練習をした。當日は、第四師團の小島樂長が自らタクトを握つて、京二中の音樂隊を指揮して呉れた。當日の式典は頗る盛大なもので、角力その他の運動行事、假裝行列、狂言、演劇殊にこれは歌舞伎劇で、二年生の今井君が座頭格で連日の猛稽古、衣裳附も本職を頼むと云う凝り方、上演したのは「曾我の對面」だつたが、學生の演技とは思われぬ程立派なものだつた。私のクラスなどは白虎隊の活人画でお茶をにがしたが、各級の打込み方は大したものだつた。恐らく學生がこれ程亢奮し歡喜した行事と云うものは、以後は知らず、以前にはなかつたのではないか。この記事は校友會雜誌第六十九號の落成記念號に載つてゐる筈です。序に申し上げるが、記念號の表紙の圖案は私の描いたもので、上部に恩賜館の瓦を置き、下部に聴診器に模した水仙を圖案化したものだつた。次に私のクラスのことを語る前に、この學年には關係はないが學校としては重大問題だつた、同盟休校事件について話させて貰いたい。之は誰方かお書きになるとも思うが、私もこの時一年生委員の一人だつたので申上げるのです。事の起りは故人になつた廣木教諭が、文學士と云う肩書で先任者奥野先生に代つて獨逸語の主任になつた。この人は神經質で至つて狹量の人だつた。庶民的洒脱で情熱を持つた奥野先生が學生に信望があつたが、陰に陽に奥野先生を誹謗した。それを不快として、奥野先生は辭表を出した。正義觀の強い學生達は、奥野先生擁護、廣木教諭排斥に起ち上つた。同盟休校を決定して目的貫徹を期したのだつたが、校長代理の工藤先生の威嚇に逢つて脆くも潰え去つた。參加したのは三年生以下だつたが、上級生から遂次崩れて來た。考えてみれば之は無理はない。醫學校は他の學校と違つて、中途半端で放り出されたのではつづしが効かない。卒業期を後一年に控えていては、慰留されてサラリと止めるのが賢明の策である。一年生の私などは退校されれば、他校へ受験しても後圖が謀れるという覺悟はあつたが、三年生ともなればそれはむずかしいことである。封建性の強かつた時代でもあるし、こうした弱點を百も承知の老獪な校長代理に逢つては、こう落着くのが當然だつたと思う。それにしても一年生を代表した二人の委員が、共に落第して仕舞つ

たことは喜劇の様な悲劇だつた。私もその中の一人だつた。學年試験を目睫に控えてこの事件だつただけに、實際勉強をしなかつた。敢て悔ゆるところもなく、私達は新人生を迎えて潔よくそのクラスに投じた譯である。私達と落第の行を共にした仲間が、それでも十五、六名はあつたであらうか。この連中がまた揃ひも揃つて強か者で、將來クラスの指導推進に役立つ人達の半数は、この落第組から出ていたのは面白い運命だつた。然らばクラスとして四年間何をして來たかと云われると、誠に恥しい次第である。同志的結合を強化して來たと云うなら、敢てこの級だけではない。どのクラスだつてそうである。唯だ一つ残して來たことは、「豫診學生にも豫防衣を着せる」ということを、私達の運動によつて貫徹したことだつた。以前は病院に残っている醫員連中が學生と混同されることを懸念して、この制度を阻んでいたという話だつたが、そんな愚劣なことはないと、クラスから委員を出し各教授に具申して、漸くこの制度を確保した譯だつた。クラスの者の意志が疎通して、非常に團結力が強かつたという一例を挙げると、卒業生のどのクラスもやるように、恩師を招待して派手に卒業祝賀會をやる。私達のクラスは祇園の中村樓でやつたのだが、その晴れの祝宴に、一同浴衣の揃で行こうと云うのが、私の發起だつた。それは奇抜でよいだらうと賛成して貰つたので、私の友人の工藝學校の學生に依頼して下圖を描かせた。白と黒の大きい豎縞であるが、その黒い縞の中には上半身の人體斷面圖が竝めこんである。そしてその黒白の縞にかゝわりなく、ジギタリスの模様を大きく配したものだつた。起死回生を象徵したもので、恐らく醫者ならではの着ない注文染の浴衣だつた。こんな馬鹿氣たことをやつたクラスは、八十年の歴史の中にも他にはないと思う。私達の卒業したのは大正四年卯の歲だつた。一緒に集立つた同志の、長かるべき交友連繫のためにも、同級會の名をつけて置くのではないかというので、私が卯を鬼にし、杏林の杏を上下に置き換えて呆にし、兎呆會ではどうかとはかつて決定したものだつた。この會は卒業後十五年目に、「この間十五年」と云う、映画のタイトルのような寫眞帳を出版した。これは都市に、町に、村に、相當の地盤をつくり、妻子を擁している會員達の家庭を基準にして撮影したものだつた。その後は五年目毎に會合して、舊交を温めて來た。來年は四十年目になる。既に物故した會員のためには、會合毎に打集つて、京の知恩院で法要をいとなむのが例になつてゐる。さて來年に迫つた兎呆會はどうで

あろう。紅葉の高雄か、晩春の八瀬大原か、今から待遠しい限りである。

大正四年一月十七日 兼て留學中の教諭常岡良三は、歐州戰亂のため、一時英國に身を寄せていたが、無事歸朝した。三月 教諭端野令三（内科學）退職。四月 教諭中村登は大正五年六月迄、京都帝大醫科大學に於て耳鼻咽喉科學の研究を命ぜられた。五月 京大助教吉川順治、教諭に任命、醫化學擔任のことゝなつた。五月十五日、寺町廣小路上ル本山清淨華院に於て、本校物故教諭・講師の追悼法要が営まれた。當日の諸靈は

教諭 田村克己（解剖）

講師 上田勝行（獨語）

教諭 永井德壽（生理）

講師 高屋賀祐（獨語）

教諭 朝井元章（精神）

講師 井上喜久治（眼科）

教諭 藤谷功彦（藥物）

講師 刈谷無隱（倫理）

同月教諭犬塚一郎（獨乙語）退職。十月二十六日 天皇陛下の御眞影を下賜せられたので奉戴式を行つた。十一月十日 大正天皇即位の大典を行われるに當つて、校門に大綠門を建設して祝意を表し、十日即位禮の當日、職員學生一同講堂に集合、奉祝式舉行、續いて職員學生連合の祝賀會を催し、十七日は大提燈行列を舉行、全校これに参加した。教諭佐武安太郎が東北帝大教授に轉出、後任に京大助手越智眞逸が教諭に任ぜられ、生理學を擔任した。教諭小柳美三（眼科）、大阪赤十字社病院に轉出のため退任した。

大正五年一月 小柳教諭の缺員補充として、東京帝大河本眼科より増田隆を教諭として迎え眼科學を擔當せしめた。二月 本校明治十七年卒高田耕安は、「肺結核病早期診斷法」（邦文）の論文により醫學博士の學位受領。四月

本永七三郎が教諭に任ぜられ、齒科學を擔當、本校に於て始めて齒科部を獨立せしめて初代齒科部長となつた。同氏は東京帝大石原博士の下に齒科學を研究、當時醫育機關に齒科の講座を設置するの必要は輿論であつた。大學は勿論、齒科を置いた學校は殆どなかつたが、他校に卒先して本校が實施したものである。教諭本庄謙三郎は、「グルタール酸が實驗的糖尿病に及ぼす影響に就いて」(邦文)により醫學博士の學位を得た。十月二十七日 皇后陛下の御眞影を奉戴す。十二月 教諭野田浦弼、神經精神科部長に就任。

當時の本校教諭陣の顔觸れを舉げて見よう。

學校長	醫博	工藤外三郎
解剖學・組織學	赤座壽恵吉	
解剖學	岡嶋敬治	
生理學	越智眞逸	
醫化學	吉川順治	
病理學	角田隆	
病理學	梅原信正	
衛生細菌學	醫博 常岡良三	
内科學	醫博 工藤外三郎	
内科學	醫博 小川瑳五郎	
小兒科學	醫博 本庄謙三郎	
醫學專門學校時代		

外科學

醫博

河村 叶一

産婦人科學

加治 安信

眼科學

増田 隆

皮膚梅毒科學

佐谷 有吉

耳鼻咽喉科學

醫博

中村 登

神經精神科學

野田 浦弼

獨逸語・倫理學

廣木 多三

獨乙語・調劑實習

立人 保太郎

助教諭として外科に藤森舜吉、精神科に久保昱二郎、内科に松永周三郎、小兒科に齋藤二郎等の名も列し、講師には小南又一郎が法醫學に、藥物學には革島廉三郎等の顔觸が見られた。

大正六年二月 從來本校教諭・助教諭と云う名稱で、直轄學校教授とは差別的稱號であつたが、本年一月二十七日勅令第五號公立學校職員制發布せられ、爾今官立同様、教授・助教授と稱することゝなつた。三月 教諭吉川順治（醫化學）は、向う二力年間京都大學へ留學を命ぜられた。これは近く本校に胃腸科を獨立設置の計畫あり、氏が同部長に決定したので、専ら斯學研究のためである。

本校に偉大なる足跡を残した、元本校々長島村俊一の功勞を表頌するため、各教授、門弟、在京同窓生等發起人となり、その表頌會を組織、趣意書を汎く校友に配布賛同を求めた。左にその趣意書を摘録して、氏の偉大なる功績の一端を偲ぶ資とすることゝした。



## 島村俊一博士表頌會趣意書

先生は明治二十年東京帝大醫科を卒業、直ちに同大學精神病學教室に入り研究、二十四年歐洲に遊學數年、二十七年歸朝せらるゝや直に我校の招聘に應じ、その十二月教諭として赴任、爾來我校の明星として斯道のため幾多學生を教導し、校運發展に努力奮闘せられ、大正五年十二月我校との關係を斷たるゝ迄二十二星霜、其偉大なる功績は我校の隆興と共に燦として輝けり、先生は我校教諭とならるゝや、神經精神科を擔任し該教室を創設、諸般の設備計畫を整へ、一意專念指導の職を樂しみ、其間幾多の新業績を發表、本邦精神病舎の施設不完備を慨し、卒先明治三十年模範的精神病舎の建設を計畫、直ちに工を起し病舎成る、之れ我國醫學校に於ける精神病舎の嚆矢なり、先生は我校神經精神病學教室の鼻祖たるのみならず、復以て關西醫壇の泰斗たりし所以なり、明治三十五年五月、前校長の後を享けて我校々長の榮冠を戴かる、恰も我校存亡の難時代にして、京都帝國大學醫學部新たに設立、在來の教職諸先生は舉げて大學に榮轉し、我校には獨り先生の止まらるゝのみとなり、此難局に當つて我校院經營の重任を帯びらる、時に府理事者には我校廢止の論議案に上り、我校の運命や實に風前の燈火の如く、先生の胸中今追懷して誠に涙あり、先生は衆論の前に立ち、自己の所信を屈せず、自己の素願を貫徹せざれば止まざる意志の人なり、徹宵當局に其の非を論破し、東奔西走、到る處に説破して、遂に當局をして此難案を捨てしめたり、是れ先生の第一に遭遇せられし難局なり、此時局に處して誤らず、茲に我校存在の基礎を確保し、將來の隆昌を豫想せらる、之れ實に我校中興の祖と稱すべく、我校今日あるは全く先生の偉大なる努力の賜に外ならず、爾後校長として、明治三十六年專門學校令の發布と同時に、舊來の施設狹隘なる校舎にては日進月歩の醫育機關として缺くる處多し、茲に校院舎の改築内部諸般の改良を企圖、約四十有万金の大工事を易々として本校の自力により實行せり、大正三年十一月此工全く竣工し、盛大なる落成式の舉行せられしは猶耳目に新たなり、茲に於て我校の面目を一新し、以て今日の隆昌を見るが如き、實に先生の校長時代に於ける最も華麗なる功績の一なり、外に内部職員の招聘、選任及外國留學の途を啓き、後進誘掖の法を樹立されし如き其功績枚舉に遑あらず、此の偉大なる功績と實果は、我校歴史の特筆記念せざるべからず、然るに積年の努力奮闘は、先生の健康

に多大の禍を致し、明治四十三年三月、校長の冠を掛けて職を辭さる、我校關係者は此崇高なる人格と、國家に捧げられし功勳とを賞揚せざるべからず、校長の重職を辭せられた後も、講師として、神經精神科部長として、病褥にあり乍ら夢裡にも我校を忘れたることなし、大正五年十二月、我校今後の經營發展に聊か顧慮する處なきを認め莞爾として講師・部長を辭さる、茲に多年の宿縁の先生も、表面全く其交渉を絶たるゝことゝなれり、然れ共先生の功績は永久に我校と離るゝことなし、世は時季なりと雖も、功人の功勳を頌し、師恩を感じ、先進偉人を敬慕する念慮は我日本民族特有の美德たり、余等校友、又均しく此點人後に落ちざるを思ふ、茲に先生の功績を頌し、積年病褥の苦を聊か慰めんとし、同感の有志相謀り、先生の記念表頌の事業を發起し、以て其資金を募集するものなり、請う、我校に關係ある校友諸賢及病先生の功績を賞揚記念すべきを賛するの諸賢は、余等發起人の微意を諒し、多大の御援助あらんことを懇願す（採要）

五月 中村登、常岡良三兩教授醫學博士の學位受領。中村教授主論文「迷路の炎症に就て及實驗的研究」（邦文）  
參考論文一篇。常岡教授主論文「異性抗體に就て」（獨文）參考論文三編。六月 教授本庄謙三郎、病氣のため逝去した。七月 校長兼教授工藤外三郎、依願退職。氏は明治三十三年九月教諭となり、内科部長或は教務主任、校長、院長として常に本校の經營發展に努め、患者の診療、學生の訓育に幾多の功績を残し、校長の職を去るに際し、一同衷心よりこれを惜しんだ。後任校長として教授小川瑤五郎が就任、院長を兼務した。氏は東大出身、大正三年十月本校教諭を命ぜられ、内科第二部長となり、爾來氏の行政的手腕は校の内外に高く評價されていたが、今回校長の重職に就き、校風の刷新と、經營面に多大の關心と期待が持たれた。曩に小兒科擔任教授本庄謙三郎逝去により、後任として三浦操一郎を教授に迎え、小兒科部長に就任せしめた。三十一年東京帝大卒、京大小兒科赴任後、明治四十三年歐洲に遊學研究を重ねた人である。九月 内科學工藤教授退職後の後任として、尾中守三が教授に任命せられたが、

在職僅かにして、十二月長崎醫專教授に轉じた。十一月十一日 本年二月島村俊一先生表頌會の趣意書を發表し、本校關係者その他に賛同を求め、資金の募集に着手したが、豫期以上の好成績を挙げ、記念表頌事業として、壽像を建設、並に記念品を贈呈することに決定したが、その壽像は美事竣工をみたので、この日殊に博士誕生の日をとし、盛大なる除幕式が舉行せられた。當日島村博士は發熱のため、臨場の榮を得ることが出来なかつたことは千秋の恨事であつたが、幸子夫人、遊喜子母堂、實母中村花子刀自、その他親戚の方々が列席、來賓京大伊藤醫科大學長、松浦院長始め、加門、平井、和辻、今村、速水、高山の各教授、本校職員卒業生等三百名が參列、式は午前十時半梅原教授の事業報告後、門弟土屋榮吉令嬢宗子の除幕、常岡教授の式辭、野



島村俊一壽像

田教授の記念品贈呈、小川校長の表頌演說の後、京大加門教授が登壇し、同窓親友としての表頌辭を述べた。來賓その他の祝辭・祝電披露あり。土屋榮吉は、當日博士臨場なきたため、幸子夫人が病床にて博士の口述を受け筆記した挨拶を、言々句々朗讀、最後に伊藤京大醫科大學長の發聲により、博士の萬歳を三唱、式を終つた。式後、講堂に於て立食の饗宴あり。島村博士に對し二斗の紅白饅餅と大鮮鯛が贈られた。當日校庭には各種模擬店を設け、餘興場では學生角力、琵琶、落語等數々の催しがあつた。かくて壽像は永く本校々庭に、默々と談らざる不朽の功績と不言の教訓を、學生及學校關係者に垂れることゝなつた。

壽像鑄造

三谷合名會社銅器部

原型彫造

東京美術學校出身 大西三次郎

臺 石

石 工 内田龜次郎

胸像にして、青銅を用い、高さ三尺五寸、臺石花

崗石本磨、地上三尺五寸、高さ一丈一尺

記念品

竹内栖鳳画伯の懸軸

一幅

金 屏 風

一双

なお島村博士より、本校奨學資金として金壹千圓、校友會資金及青連同窓會基本金として各五拾圓宛寄附の申出があつた。

十二月 精神科野田教授は研究のため米國へ留學を命ぜられ、留守中助教授久保昱二郎が部長代理を命ぜられた。

## 後 期

自 大正 七年  
至 同 十四年

醫學專門學校時代後期とは、大正七年より十四年に至る期間で、大學陞格の實行期とも云われる期間である。

思うに明治卅六年專門學校となつてから約二十八年、其の間府當局の同情ある理解の下、學校當局の絶えざる努力と同窓各位の愛校の赤誠とによつて陞格の難事が達成されたのであつて、吾々の感謝に堪えない所である。殊に實行期に於ける各位の熱烈な活動に對しては衷心敬意を表する次第である。

大正七年六月十九日 解剖學元教諭前島長祐死亡、同月二十日解剖の上、全身骨格を教材に供せられた。

同年十二月附勅令第三八九号を以て新たに大學令が發布され、單科大學の設立が認容された。時の文相中橋徳五郎は醫育を統一し、醫育機關の大學一本化を政府の施策として取上げた。

茲に於て各地に散在する官立の醫專を始め、公・私立の醫專が續々と昇格することとなつた。何分にも事の始まりが、醫育機關の大學一本化と云う處に胚胎してただけに、事によつては母校の存亡に係る事と、學生は大いに刺戟され、この問題に關する限り教授より熱心であつた。即ち生徒にとつて母校の無くなる事は、在校中は勿論、社會人となつた後からも、母校愛から耐えられない事だつた。素より廢校などと云う事は問題外で、新大學令によりどうしても陞格しなければならぬと考へた。

陞格への運動の氣運は九月頃から始まつたが、十月には府會でも取り上げられることとなつたので、府會を傍聴せんとする話がクラス會で決議され、各クラスから選出された二名宛の代表委員が傍聴を申込み、その他デモにも出掛けた。陞格には幾多の困難が横たわり仲々實現しないので、心から母校を愛し母校の發展を希う熱意の餘り、時の校長を、今で云う「ツルシアゲ」にしたり、又ある學生は、陞格により何等かの利益を得るのは教授と今後の學生のみで、我々はたゞ母校愛の念で運動しているだけだ、それに當局は餘りにも不熱心であるのはどういふ譯かと第五教室の演壇で難詰した。小川校長は是を聞き、涙と共にその間の事情を話し、辭職の覺悟をほめかした事もある。

當時の學生はノンビリしていたが、陞格問題に就ては眞劍で、度々クラス會が開かれ、殆んどすべての學生が非常な熱意をもつていた。就中大正十二年卒業の、現在神戸に開業している和泉正忠が主導的立場に立つて居た。遂に委

員を選んで學校當局の眞意を聞く事になった。その結果學校當局にも大なる熱意のある事が判り、學生も漸く安心し落着きを見せた。

大正八年三月 母校陞格運動に對し次の様な檄文が全國卒業生に配布された。

本校陞格に就ての意見

母校陞格問題を論じ校友諸氏の奮起を望む

母校陞格問題に關する經過及希望

校友諸君の後援を望む

母校陞格に關する卑見を陳べて校友諸氏の奮起を望む

第三次危機迫る

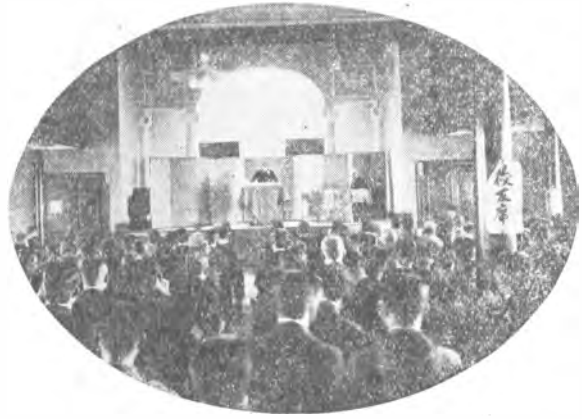
貳千の先輩に訴ふ

單科大學令適用に就て

人は不平を有す

同年三月十二日 教授會は、本校陞格に關し教授會の意志と希望とを府知事に陳情して置く必要のあることを認め、教授の連署を以て長文の建議書が提出せられた。其要旨は、先ず我校が約五十年に亘り斯界に貢獻した偉大なる功績から説き起し、時世の趨勢に適應せんが爲には、此の際陞格の止むべからざる所以を縷々陳述し、學校當局は既に陞格に對する充分なる計画方針を確立せるを以つて、目的貫徹に對し府當局の絶大なる御支持を祈願するものと云う意味の請願書であつた。

校長	小川 瑳五郎
卒業生	小笠原 孟敬
教授	角 田 隆
教授	吉 川 順治
教授	常 岡 良三
學生有志	淺 田 操
學生有志	布 施 俊雄
學生有志	和 泉 正忠
學生有志	甲 原 齊



全國校友大會

同年四月二日 三條柳馬場青年會館に於て、母校陞格目的達成のため全國校友大會を開催したが、全國より集まるもの無慮八百有餘、校友諸氏の熱烈なる聲援により、豫期以上の成果を挙げた。即ち本大會が社會に與えた感動及刺戟は甚大であつた。爾來約二カ月、更に各種の機會を通じて大學陞格の趣旨と希望とを努めて世に訴えたが、其効空しからず、漸次各方面に於て我校の陞格要望を是認せんとするに至つた。

因みに全國校友大會に於ける宣言及決議は次の如きものであつた。

#### 宣 言

一、醫學の進歩發達は國家の興隆に關すること至大なり 實に醫育統一は天下の聲にして又時勢の要求たり

二、這般發布せられたる新大學令は單科大學を認容せり 是れ醫育統一の前提にして吾人の勵起を促す警鐘たり

三、吾人は我校の光輝ある歴史と其の偉大なる功績を尊重し之を京都府立醫科大學に陞格せしむる事は我等の爲すべき當然の義務たると同時に又邦家に盡す權威ある事業なりと信す

#### 決 議

一、母校陞格の目的を貫徹せんがため陞格期成同盟會を組織する事

醫學專門學校時代

但し會員は全校友を以てする

二、全校友より資金を醸出し之れを基金の一部として母校に提供する事

三、宣言の趣旨に依り目的貫徹の爲に極力奔走努力する事

同年四月二十八日 豫て京都大學留學中であつた教授吉川順治は、歸校と共に萬端の準備を整えた新設胃腸科學教室で、専ら胃腸病患者の診療に従事することゝなつた。胃腸科が内科より獨立したのは實に本校を以て嚆矢とする所で、當時の學校當局の炯眼に敬意を表する。勿論學校に於ても新たに胃腸病學の講座が置かれ、吉川教授が是を擔當した。

同年五月二十五日 陸格期成同盟會中央部實行委員會發會式（市部及山城郡部一圓）が舉行された。該委員會は期成同盟會の中軸を成すもので、該委員會に於て期成同盟會總則並に校友醸金に關する規約の制定を見、期成同盟會は爰に其の基礎を確立するに至つた。陸格に關し必要なる學校及病院の擴張、同設備の充實、豫科の設置、その他陸格に伴う諸般の施設を具體的に調査する爲、角田・吉川・常岡・梅原の諸教授及び中道幹事等が陸格制度調査委員に選ばれ、各自分擔して夫々調査することゝなり、又一方教授會に於ても時勢の進運に伴い、從來の學制中改正を要する點あるを認め、殊に陸格運動の漸次進展しつゝある際、豫め之が研究を行うは目下の急務なりとし、校長より三浦・越智・梅田・中川・草島の五教授を調査委員に選任し、時代の趨勢に適應した制度を考究することゝなつた。

同年五月 京都府は臨時府會を召集したので、此の機會に本校當局が議員に會見して、本校陸格の急務なる所以を陳述するは最も緊要なりとし、本會見の機を議長に申請した。然るに會期短少にして議事多忙なるに拘わらず、幸に



も五月十日、議事終了後議長室に於て會見するとの回答を得た。依つて當日午後、小川校長を始め梅原教授、中道幹事等は議長室に於て全議員と會見し、先ず小川校長は、這般發布せられた新大學令と醫育統一に關する文部當局の見解を縷々數千言を費して詳細に亘り論述し、最後に我校の光輝ある歴史と其の偉大なる功績とを考へる時、當然其の存立の策を樹てなければならぬ、若し存立せしめようと欲するならば、此の際勢い陸格せしめなければならぬ、然らざれば、目前に迫る醫育統一の趨勢は我校をして自然消滅に導くものである、吾等は學校當局なるが爲に斯く言うのではない、本邦醫學の發達を熱望し、醫事衛生の公衆化を廣く考慮し、延いては醫育機關の完備を欲するが爲に言うのである、即ち本校の陸格は獨り本校自體の爲のみではない、國家の要請に應ずるものである、本格的陸格は時

代の進運に順應する當然の歸結である、願くは我等の意のある所を諒とせられ、本校陸格に對し絶大の援助を冀うものであると附言した。

次いで梅原教授は、校長の陳情と同一趣旨の下に一般校友の意見を布衍し、且全國校友大會に於ける宣言及決議を述べ、其の熱情を披瀝し、我校友の熱烈なる愛校心と、陸格問題に關し校友一同の日夜憂慮心痛の情を訴え、一日も速に是が解決を望むと、言々句々血を吐く熱辯を以て全校校友の熱意を開陳した。



梅原信正

次いで多數議員より種々の質問があつたが、校長及梅原教授は交々起つて明確なる答辯を酬い、立ち所に其れ等の疑問を氷解せしめた。以上當日の會見により全府會議員は學校當局の意志を充分諒解し、且つ全校の熱意を諒承した

様であつた。即ち曰く、本校の陸格問題は既に議論の餘地なく、之れを實現せしめることは當然の趨勢である。けれども陸格には府の經濟狀態を顧慮する必要があるので、此の點を考究しなければならない。其の方策にして最も適切可能なる方法を選ぶなら、一般は必ずや賛同の意を示し陸格を援助するであろうと。茲に前後三時間に涉る會見の幕は成功裡に閉じられた。叙上の會見に於て、各議員が好意ある同情を以て本校當局者の意見を諒解して呉れたのは、吾等の感謝に堪えない所である。

大正九年六月九日以降四週に亘り、毎週水曜日、露國前カザン大學教授ボルディレフを聘し、午後三時より同五時迄、第五教室に於て「デモンストラチオンス・クルズス」が施行せられた。當時、氏は消化生理に關する深厚なる學理を解き、優秀なる技倆を以て、パヴロフの小胃形成術、胃瘻管形成術等の實驗的手術を行い、獨逸語にて懇切に説明した。

大正九年開催の府會に提案された、陸格計画の一般豫算を包含する大正十年度本校院豫算は、直ちに調査委員に附托せられ、其の細目の精査を遂げ、更に本會議に於て全會一致を以て可決協賛を経た。

大正九年十一月七日 教授穂積茂が遭難死亡した。同教授は元來釣りが好きで、その日も鴨川に夜釣りに出かけ、出雲路橋附近で怪漢に襲われ、血まみれのまゝ近所の農家に轉げ込み救を求めたが、出血多量のため絶命、犯人は五里霧中で遂に迷宮入りとなつた。

穂積教授は本校の獨逸語教育に對し多年盡瘁し來つたが、不慮の災難で逝去したのは甚だ遺憾である。本校は故穂積教授の在職を記念し、且多年の功勞に酬いるため、故穂積教授記念資金を募集し、これを以て獨逸語に關係ある圖書を購入し、故教授の銅版寫眞

を各書籍に貼附して本校に寄贈、永久にありし日の教授を記念することゝした。

大正十年一月二十六日 本校より提出した陸格認可申請書は、府知事の承認を経て文部省へ提出された。

文部省へ提出した計画の要は、(一) 大學豫科三カ年を新設すること、(二) 本科及病院は現在の場所に於て之に改築増設を施し、其設備内容には巨費を投じて完成を期し、學用患者數を壹百名以上に増員、更に有料患者收容に對し二百床を増設し、現在の精神病舎を他に移轉せしめて、定員二百名以上の獨立した精神病院を設置すること、(三) 其の他藥學教室、法醫學教室を増築して其の完成を期し、なお醫學大圖書館、學生集會所を設置する等、設備並に内容充實に要する多額の豫算を計上したが、其の額は大約壹百萬圓に達した。此等豫算の全部は理解ある府當局に依つて協賛を経たものである。

全國校友大會の決議に基づく醵金は、校友諸兄の絶大な愛校心の結果、豫定の成績を挙げ得たるを以つて、中央部實行委員、校内實行委員及理事は、豫科建設の候補地を市内數力所に求め、種々検討の結果遂に京都市上京區大將軍鷹司町に於て六千八百九十六坪の土地を選定し、買収交渉を開始、土地所有者との協定も順調に調い、之を買収して陸格期成同盟會の名を以て本府に寄附提供の手續を了えた。

同年七月 其の筋の内報により陸格の認可が確實となつたので、豫て計画せる通り、同年九月に豫科一・二年生を募集し、同月十一日を以て本校構内の假教室に於て授業を開始した。因みに豫科一年の應募人員六百四十餘名中、選拔試験の結果入學を許可した者百三名、同二年は當時の醫專學生及同卒業生中より志望者を募り特に入學を許可したもので、其の採用員數は二十五名であつた。豫科の教職員は當事者の幹旋努力に依り、各科夫々適任者を物色し得た

が、叙任手續の關係上一時講師として授業を擔當、十二月五日附にて何れも公立大學豫科主事及教授として夫々正式の任命を見た。

帝國高等教育機關擴張の議あるや、全國校友に飛檄して母校の危機を懇え、大正八年四月二日全國校友大會を開催して陞格期成の同盟を結び、敢然目的の遂行に努力せんことを約してより三星霜、各部實行委員の熾烈なる奮闘と全國校友の潑刺たる聲援は、當事者不斷の努力と相俟て着々事業の進展を促し、大正十年九月開會せられたる帝國教育評議員會は滿場一致吾校の陞格を是認し、十月十九日文部省告示第四七一號を以て陞格認可の發令を見、さしも複雑多難であつた陞格問題も茲に目出度解決し、大學としての第一歩を印することゝなつたのである。

茲に於て、十一月一日の創立記念日に、母校創立五十周年記念式典を兼ねて陞格祝賀式が盛大に行われた。

校庭に於ける記念式場から裏の河原まで一面模擬店が設けられ、出席者壹千貳百有餘、一大園遊會がくりひろげられ、その夜は職員學生の提燈行列で、先ず校門――御所建禮門（萬歲三唱）――堺町御門――丸太町――寺町――二條の順路で河原町通へ出、來賓を招待して宴會が開かれていた京都ホテル前に到着するや、常岡・小川・角田教授はバルコニーに出て之に應えた。提燈行列はこゝから北上して學校に歸つた。

尙皇后陛下には祝典を聞召され、御内帑金を下賜せられた。

翌二日は植物園に於て記念大運動會が催され、賣店等も出て盛澤山の競技がくりひろげられた。

同じ醫者になるのに大學と専門學校の區別のあるのは矛盾しているので、醫育統一の聲は早くから巷間に叫ばれていた。すでに此の事あるを洞察して、大阪醫專校長佐多愛彦氏は先ず二カ年の豫科を同校に附屬せしめて、名も大阪高等醫專校と呼稱し、盛んに陸格運動をやつたものである。そのためその頃の學徒は、同じ地方醫學士の稱號を得るのにわざ／＼二年間他校より餘分の期間を費さねばならぬ同校を敬遠して、最後の手段の希望校としたものである。兎に角その運動が功を奏し、内務省から官僚の一行が同校の設備視察にやつて來た。その時、ある一員が校舎の壁をたゝいて、耐火建造物ではないですね、と言つたそうだ。その時佐多氏はあたかも響の音に應ずるが如く、現代の醫專は誠に日進月歩の有様で、その爲この校舎等も五カ年に一回位は改築の必要があると云つたそうである。誠にその言やよし、實に機智機略に富む氏の大風呂敷に感じ入つたものである。遂に大正四年に大阪高醫の大學陸格の報が一度傳えられた時、吾々は當然の事と思ひながらも愕然として目を見はつたものである。

然るに此の報が傳わつて相當な日數がたつても、母校は靜かなる事あたかも風なき森の如きであつた。そこで一日、當時母校の教室に席を置いていた小生等血の氣の多い連中が數名醫化學教室に集つて、この無爲無策を慷慨悲憤して協議したものである。その結論として、兎にも角にも吾々數名で各教授を個別に訪問して鞭撻しようと言う事に衆議一決したのである。先ずその皮切りとして時の生理學教授の先生の門を夜間ながらたゞき、その煮え切らない態度に憤激し、翌日内科教授の先生を訪問し事の次第を綿綿とうつたえ、先生も大學教授になられる事でもあるし、是非御盡力の程を御願ひ致しますと申し入れた。それに對して先生は、吾々は別に陸格なんかなくてもどうでもよいんですが……と言われて立腹したものゝ、他校出身の教授としては無理からん事であるとも思つた。次には耳鼻科の教授N先生を部長室に訪れた時、先生は、諸君から言われる迄もなく吾々は種々畫策している。實は京大の荒木寅三郎總長の腹が、京都市に二つの醫育の大學は不要であると云うので、そう云う事を荒木總長が文部省に行つた時に一言にでも及んだなら、大學總長の言辭は非常に重きをなすものであるから、兎に角荒木總長の了解を得る必要がある。そこで現校長は荒木

總長の門下でもあるし、もし陞格の曉には第一代の學長になつて、君の銅像を校庭にたてる事にもなるから是非荒木總長を説いてくれと、再三再四、おだてたりすかしたりして尻をたゞいてゐるが、一向に動かぬので困りきつてゐるとなげて居られた。又一方、當時の府會議員中にも、年々巨額の金を食う事でもあり、陞格さすよりむしろ廢校させた方がよいと言う様な意見を持つてゐるものも多々あつた様で、當時では陞格の出足は困難に考えられたものである。そんなわけで吾々の教授戸別訪問も腰折れの形となつたが、母校出身教授、特にU先生の涙ぐましい御努力で、三條通りのキリスト教青年會館で、U先生司會の許に、全國卒業生の大學陞格期成同盟大會を盛大に開催し、相當多數の卒業生を集め陞格運動の第一聲をあげたのである。その時丹波出身の先輩が、路傍の大石を演壇にドカンとなげ出し、よろしくこの石の如く硬く提携し一路陞格に進進すべしと叫び、全員意氣軒昂、あたるべからざるものがあつた。閉會後先斗町の口館で懇親會を催したが、O校長は、これは困つた事になつたワイとばかりに終始腕を組み、頭をたれて居られた様であつた。詳しい事は知らぬが、その當時校長は、母校出身教授連には尻をたゞかれるし、荒木總長の意向はわかつてゐるし、中にたつて大變困つて、大阪に財團藤田某の總合大病院が建設されるので、内々そこに病院長として赴任する様な意志があるという噂があつた。要するに案ずるより生むが安く、大正十年に到り、校長をひきずりながら母校はめでたく陞格し、校長が第一期學長となられたのである。學長は五十有餘才の油の乗りきつた際、老軀職に耐えずと云うので隠退されたのもその間の消息を物語るものがある様に思われる。母校出身教授の血のにじむ様な御努力のうちに、熱血漢U先生の不眠不休の御盡力は涙なくしてみる事が出来なかつた様である。筆者の一族が大阪にいたので時々大阪に行くことがあつたが、大阪の同窓會ではNはどうも生意氣だから、あんなものがやつて來たら一文の寄附も出来ない、と云う空氣が多分にある事をきき、これは大變であるとN先生の宅を夜おそく訪れ、大阪同窓會の空氣をうつたえ善處これあるべき旨告げたものである。その後二三カ月たつた頃筆者が雪の散らつく夜、四條から一杯氣嫌で終電車に乗つたところ、U先生が寒そうな顔をしてがら空きの電車の片隅に座して居られた。先生晩く迄どちらへと問うと、陞格の事で大阪の同窓會の方へ行つたと云われた。誠にいたわしく、冷汗三斗、下宿に歸つて涙をこぼしたものである。(大五

其の二

大正十年十一月に行われた五十周年並びに大學陞格記念祝賀會の二次會が、東山祇園歌舞練場を舞臺に盛大に行われた。しかしこの陞格にも笑えぬ挿話があつた。陞格によつて、今迄京都府立醫學專門學校醫學士と稱えていた卒業生諸氏も、當然單に醫學士と呼ば得るようになると思ひこんで寄附金（陞格資金）を出したのに、さて陞格してもそんな譯には行かない事を知りや、卒業生中には記念宴會中に醉が手傳つて騒ぎ出し、この不満が爆發して、席上

病院つぶれて學校焼けて

教授コレラで死ねばよい

と歌い出す者があつた。この歌が一時大學内外に流行したものであつた。

偕て本校記念日は從來四月十六日と定められていたが、大學陞格を機會に、假療病院が栗田口青蓮院に開設された日でもあり、又それに因んで、陞格並びに開校五十周年記念式典の舉行せられた十一月一日を、本學の記念日とすることに改められた。

因みに、新大學令により陞格を認可された順位を挙げると、第一番には大正八年、大阪府立醫科大學、之に續いて同九年、慶應義塾大學醫學部、愛知縣立醫學專門學校であつた。翌十年は本校、之に次いで東京慈惠會醫學專門學校で、實に本校の陞格は全國で第四番目であつた。

抑々豫科は、開講時期の關係上九月を以て學年の始期と定めたが、本科との連絡上之を四月に改める必要があるの  
で、本年度に限り、日々の授業時數を増加し、又冬期休暇を廢止して補充講義を行つて、所定の授業時間數を完了せ

しめ、大正十一年三月末日夫々上級に進級させた。

同年五月 買収提供地に豫科の校舎が新築竣工したので、本校内の假校舎より移轉し、新校舎にて豫科の授業が開始された。

又、七月 市内花園の豫科隣接地に新病棟落成したので、之を附屬花園分院と稱し、主として精神神経病患者を收容して開院、診療を始めた。

九月二十四日午後十時頃、大學の講堂東北隅にある電氣スイッチ附近より出火、何分夜間のことでもあり、木造のため火焰は瞬間に同建物を包んだ。居残りの教授、醫員及び學生等は消防手に協力して消火に努めたが、同建物を烏有に歸したのみで、約一時間後鎮火した。同建物は解剖學教室とも接近し、一時は猛烈な火勢に延焼を氣遣われ、その上人院患者の見舞人等殺到して非常な混亂を呈した。然し幸にも重要書類は全部搬出され、數人の消防手が輕傷を負つたに過ぎなかつた。出火原因は漏電の由。因みに同建物は洋式二階建六十坪餘で、明治四十一年の建築に係るものである。



花園分院

及び花園分院開設の祝賀會が行われた。附近の家々の軒には眞赤な紅提燈が常盤の松の枝につられて、このよき日から祝福している様に、さやけき朝の風にゆられて飾られていた。潑刺たる新生の歡びと限りなき希望に燃ゆる一

大正十一年十一月一日 うらゝかな、恵まれた此日に、吾が醫科大學豫科移轉



同の面にも、一種の緊張が溢れ漲つていた。筈の跡も美しい校門や、新しい紅白の幕をめぐらした玄關前に満ちていた静けさは、此の日式典に列る來賓諸貴の山なす自動車や俵のために破られた。午前十時半厳かに式典は行われ、百餘の來賓を始め、教職員全學生々徒は嚴かに君が代を合唱し、後學長の挨拶に次いで、池松府知事・馬淵京都市長・荒木帝國大學總長・池田府會議長・松浦醫師會長・小笠原同窓生代表・檜原學生代表・山口生徒代表の祝辭朗讀、一井府技師の工事報告などがあつた後、學長の閉會の辭により式典は滞りなく終了し、一般の參觀者は、本日の餘興の外科手術活動寫眞並に學内相撲大會（京都全市小學校生徒參加）に一日の享樂をほしきまゝにし、特に相撲大會は可愛い少年應援團の熱烈な聲援や拍手と共に大人氣があつた。尙十月二十九日には豫科開校・分院開設記念陸上大運動會が下鴨植物園グラウンドに於て開催され、十一月四日には豫科開校記念關西學生雄辯大會を寺町丸太町上ル山口佛教會館にて開催、何れも未曾有の盛會であつた。

大正十二年一月二十四日 本學學術集談會の發會式が第五教室で衛生微生物學教室當番の下に開かれ、小川會長の發會の辭に次いで、常岡・増田・赤座各教授の講演があつた。來聽者約三百名で大成功裡に閉會した。翌二月十六日に第一回の集談會が開催され出演者八名であつた。當日は折悪しく雨天であつたが、それでも聽衆は約百名であつた。

兼て工事中の附屬醫院二等病舎（第十三及び第十五號病舎）新築落成し、四月より入院患者の收容を開始した。同病舎は元精神病舎跡で、加茂川土堤上に位置し、東山を一眸に收めて四季の眺一入なる上、採光、通風、暖房等に細心の注意が拂われ、且つ非常の場合を顧慮し、避難設備（非常用大階段、エレベーター等）に遺憾なき病舎として、

其位置と云い、設備と云い、蓋し當時として他に比類を見ない理想的なものだつたと思う。病舎は二階建及び平屋建各一棟にして病床一〇七床を増加した。

同年五月一日 本學の學位授與規定が認可され、外科助教授宇野鬼一郎が、後、大正十四年、第二號の學位記を獲得した。

次に附屬病院炊事場及び大食堂の建築が、大林組の手によつて六月初旬より着工せられ、十二月に至り竣工した。同館は鐵筋混凝土造り、近世復興式陸屋根造り三層樓（地階とも四階）にして建坪百三十二坪（總延坪、地階屋上庭園共五百五十六坪五合）、地盤よりパラベット上端迄總高さ四十五尺三寸、河原町通に面し巍然として聳立した。各階の區分は、地階は物置、一階は炊事場・配膳室・食器消毒室・事務室・便所及浴室、二階は外來患者食堂・看護婦並に附添人食堂・便所及洗面所、三階は大廣間・職員食堂に充て、最新式自動昇降機の設備あり。又屋上庭園には花壇を設け、四季折々の草花を栽培し、この屋上庭園よりの眺望は甚だよく、近くは御所、加茂の清流、下鴨、東山一帶指呼の間にあり、遠くは愛宕、桂、山崎の遠峯を一眸の裡に收めることが出来、頗る絶佳なものであつた。

同年十二月 藥物學及び法醫學教室が新築落成した。其總建坪七十四坪、二階建にして、工事實は建築費・蒸氣及給水鐵管布設費・電話及電燈架設費・雜費等を加えて貳萬四千七百餘圓であつた。尙兩教室の總室數は十五室にして、就中研究室二室・實習室二室・部長室二室・助手室二室、其他天秤室・暗室・ドラフトチェンバー等其主なるものである。

當時本學には醫學專門學校の學生が殘留していた爲め、陞格後も本學内に醫學專門學校が併置されている状態にあ

つたが、漸く全員卒業したので、大正十三年九月二十五日限り廢止の旨、文部省告示第三八七號を以て發表せられ、之に伴つて附屬療病院は府立醫科大學附屬醫院と改稱された。

大正十四年三月本館が新築落成した。同館は鐵筋混凝土・外部人造石洗出仕上・腰廻り本磨花崗石造り三層樓にして、位置は正門突當りの舊講堂跡、建坪七十七坪九合、延坪二百二十六坪餘、屋上は陸屋根とし、パラペット上端まで地上三十五尺五寸である。

大正十四年四月十九日 兼て本學の陞格に對し絶大な功績を現した陞格期成同盟會の解散式、並に是を兼て陞格記念碑除幕式を舉げた。此の意義ある日を齎ぐべく、在京會員は謂う迄もなく、山城・丹波を初めとし大阪・神戸・滋賀・三重・和歌山より、又遠くは岐阜・島根・廣島の諸府縣より馳せ參じた同窓の會員は無慮數百に達し、さしもの廣い校庭も立錫の餘地ない盛況であつた。尙來賓として荒木京大總長を初め、府・市學事及衛生當局者、府・市會議員、各學校長其他多數の參列があつた。校門には華やかな綠門を、校舍周圍には紅白段駄羅の幔幕を繞らし、記念碑に面して二基の大天幕を張つて式場に充て、別に正門脇の道場を立食場とし、茲にも目醒る計りの裝飾が施された。

舉式の時間となるや一同着席、梅原同會理事の開會の辭に始まり、同氏令嬢の手によつて意義ある記念碑の掛幕は除かれ、拍手しばし止まず、續いて角田理事、式辭を朗讀し、小川學長の祝辭、安田京都市長の祝辭を初め、井尻船井郡同窓會代表・小笠原京都市同窓會代表・山本滋賀縣同窓會代表・阪井和歌山縣同窓會代表・松下三重縣同窓會代表・田村廣島縣同窓會代表・野坂島根縣同窓會代表・佐藤大田郡同窓會代表・駒井學生總代等の愛校の赤心をこめた祝辭、并に各所よりの祝電の披露があり、最後に常岡理事、同會を代表して一場の挨拶を行い、茲に目出度式を畢つ

た。引續き、設けの宴會場に於て立食の饗應があり、宴酣なる頃、荒木京大總長の發聲により本學及び期成同盟會の萬歳を三唱し、やがて解散した。因みに同會の醸金總額は拾參萬六千八百圓、學校補助金貳萬圓であつた。

陞格記念碑除幕式の當日を卜し、本學新築本館に於て、赤座教授退職記念會が盛大に舉行せられた。

## 附 記

本稿を執筆するについて、前期、中期は花園分院山本孝治郎氏、後期は學友會住岡熊雄氏の盡力に負うところが多い。兩氏は永年本學に勤續し、當時の事情に精通しているので正に適任者であつた。

又資料の蒐集及び整理に當つて當時インターン生西尾幸輝（現在内科）、西田章三（現在小兒科）、當時四回生久保泰徳、雨森幹、三回生森戸俊和、菅邦彦の諸君の協力を得たことを附記しておく。